

メダカ

八重瀬 けい

どこかで水が流れ落ちる音がする。狭い空間で生活しているのに、どこからかわからない。ベッドの中で天井をながめながら、闇からの誘いのような音に不安が襲う。夫と別居してから、居間にベッドを移し、隣のダイニングキッチンとの境のガラス戸も取り外して、ワンルームにしている。

夫婦の寝室、嫁いだ娘の部屋は、今では物置部屋だ。あの音は、物置からではない。台所でも、風呂場でもなさそうだ……。

ふっと合点がいった。玄関脇の靴箱の上に置いている水槽だ。思わず笑みがこぼれた。メダカが一匹、今も泳いでいるはず。

二年前、娘の紀夏が友人からもらって、それが繁殖したからと、十匹実家に持ってきたのだ。寿命だったのか、

病気だったのかよくわからないが、今では一匹に減っている。

水槽の水は、浄化フィルターを経由して、浄化水が再び水槽に流れ落ちる。水槽の中の水が満々と入っていると、水面と流れ落ちる水の落差は小さいので、音も静かだ。しかし、水が減り落差が大きくなると、音も大きくなり、それが家中に響くのだ。

起きたら、水槽に汲み置ききの井戸水を足そう。理由がわかり解決策を決めると、安心して再び目をつむった。

翌日昼前、水槽に水を足していると娘の紀夏が来た。水槽を覗き込む。

「うくん、相変わらず寂しそうだね」

そう言ってお弁当買って来たから一緒に食べようと、さっさと台所に行った。

メダカは気持ちよさげに泳いでいる。

「一匹だからって、寂しいもんか。誰にも干渉されずに気持ちいいよね」

それはたぶんわたしの気持ちだ。

天神で買ってきたというローストビーフ弁当は、おいしかった。久しぶりにローストビーフを堪能した。食後のコーヒーを入れて、紀夏と他愛もないお喋りをする。

「でもさ、おかあさんよく我慢してたよね。あたしの公立高校不合格の時、覚えてる？」「ああ、お前の教育が悪かったんだ……かな」残念だったねって、あたしに言えばいいの。なのにおかあさんを責め立ててさ、最低な父親だよ。でも、ポツリとおかあさんが、おとうさんとわたしの子ですよねって」「まあね、煩い！で終わったけど」

「ほんとに小言が酷い人だった。そんな人がいなくなって、おかあさんもっと爽やかな表情になるかと思っただら、意外に落ちこんでいるのに、ビックリ？」

「そう？ 別居してただけだし」

「えっ何それ……認知症かと思うじゃない。別居って言うけど、どこにいるの」

わたしは黙って、右手の人差し指を天井に向けた。紀夏は呆れた顔で言う。

「それは別居じゃないでしょ。死別って言うの。おかあさんは未亡人」

まあ、そういうことだ。死別ともいう。しかし、あの世とこの世で別居というの、間違っではないと思う。いや、想いたいのだ。娘が帰ってから、わたしはそのまま台所の椅子に座り、冷えたコーヒーを飲んでいた。

寂しいとか悲しいとか切ないとかそんな甘い感情で、別居と言ったわけではない。紀夏の言うように、酷い男だった。

特に定年退職で家に居るようになってからは、さらにエスカレートした。近所のスーパーの買い物にもついてきた。レジでその店のポイントカードを、財布の中で探してもたつくと、大声で「何で並ぶ前に準備しないんだ！」。こんな時は言い訳しない。無視！

そんなことぐらいと友人達は笑ったが、生活するといふのはそんな小さな積み重ねが、ずっと蓄積してドロドロの底なし沼のような心情になっていくのだ。そして嫌いになる。

あの日もそうだった。夕食の時、些細なことで喧嘩した。何だったか思い出せない程度のことだ。

口も利かず後かたづけをして、紀夏の部屋（紀夏が嫁いだ後は、わたしが使っていた）で、早めに寝た。すると、ド

ンと大きな物音が響き目を覚ました。枕もとの時計を見ると二時過ぎ。慌てて飛び起き、寢室のドアの前に行った。ここから聞こえたと思ったが、いきなり開けるわけにはいかない。寢室を別にしてから、互いの部屋に入る時は、ノックする習慣がいつの間にかついていたから。しかし、中からはもう音は聞こえない。部屋に戻ろうとしたが、気になりそつとドアを三センチ程開き、中を覗いた。薄暗い室内灯の中で、夫が部屋の真ん中で倒れている。咄嗟に、開けた時と同じように、そつとドアを閉めた。そつとそつと、そしてベッドに潜り込み目をつむった。見なかった。何も見なかった。心の中で呪文のように繰り返し、眠れないまま朝を迎えた。いつも通りに、七時に起き、朝食の準備をし、夫を呼ぶ。だが起きてこない。わたしは、寢室のドアをドキドキしながらノックする。「おとうさん、朝ご飯ですよ!」。何度か大きな声で言った後、ドアを開けた。同じ格好で倒れている夫。大きな声で叫んだ後、携帯から一一九番に通報。夫はすでに息を止めていた。それからは、いろいろな出来事が起こり、警察に事情を聴かれ、夫は検死に運ばれ、病死か事故死か、他殺か、などいろいろなプロセスを経て、結局は心疾患の病歴があり突然死ということに落ち着いた。

わたしは何故あの時、すぐに救急車を呼ばなかったのか。助かったかもしれない命。でもあの瞬間、「これでは小言はお終いかも」、そう囁く心の声に従ったのだ。

四十九日が過ぎ、気持ちが悪くなるかと思つたが、やはり自問自答が続く。口を利かない、無視するという抵抗ではなく、徹底的に喧嘩すればよかったのかもしれない。しかし日に日に強くなるのは、見殺しという言葉。殺人と同じだとわたしの中で誰かが言う。こんな想いが続くなら、あの瞬間大声で叫び、救急車を呼べばよかったとも思つたりする。

そして、その葛藤から逃れるのが、夫とは別居しているのだ、どこかで生きているのだ、と思ひ込むことだった。

結局、墓場まで持っていく秘密だ。

さて、ローストビーフ弁当を紀夏が持ってきた三日後、玄関で「連れてきたよ」と声がしたので行くと、メダカの水槽の中に、小さなビニール袋を入れている。

「かわいそうだから、三匹仲間連れてきた。同じ水温にしてから中に放すね」

「別に一匹でも寂しくないと思うけど」

「いいや、おかあさんと同じだよ。寂しいに決まっているよ。すぐ区別できるように、新入りは赤系。先輩は

白っぽいからわかるでしょ」

「そうだけど……でも、ありがとね」

紀夏は手慣れた手順で、三匹を水槽に放すと、今までのメダカがスーと、その三匹に近寄り、一緒に泳ぎだした。「ほーら、楽しそうじゃない」。満足気な顔で言う紀夏。

「おかあさんも、小言の酷かったおとうさんだったけど、いないと寂しいんですよ。まつ、どうせいつかは、みんなおとうさんの所に行くんだし、おかあさんは解放されたんだよ」

それを聞いた途端、わたしはいきなり笑いが込みあげてきて、久しぶりに声を出して笑った。紀夏は自分の言葉に、母親が同意したと思ったのか、一緒に笑った。

違うのよ、紀夏。心の中でわたしは叫ぶ。あの世でまた夫と会うなんて、絶対に嫌！ 地獄に落ちてもいい。そうだ、わたしは今、自由だ。メダカが楽し気なようにわたしも精いっぱい、生を満喫しよう。夫もきつと別の世界で楽しくやっている。夜中の水音はメダカが元気な証拠、あの誘いはもう終わったのだ。

(了)

同人募集

九州文学同人会では、同人を募集しています。

経歴は問いません。書きたいという熱意を文字にしてみませんか。

あなたの作品をお送りください。

編集委員会で検討の上、連絡をさせていただきます。

▷原稿送り先

Eメール：2kyubundojinkai@gmail.com

電話：090-7388-4611

〒811-1361 福岡市南区西長住3-9-2

八重瀬 けい 宛